之を視れども見えず、名づけて夷と曰う。之を聴けども聞こえず、名づけて希と曰う。之を搏うるも得ず、名づけて微と曰う。此の三つの者は詰を致す可からず、故に混じて一と為る。其の上は皦かならず、その下は昧からず。縄縄として名づく可からず、無物に復帰す。是を無状の状、無物の象と謂い、是を惚恍と謂う。之を迎えども其の首を見ず、之に随えども其の後を見ず。古の道を執りて、以て今の有を御すれば、能く古始を知る。是を道紀と謂う。

【大体の意味内容】注視しても見えないもの、名づけて「夷」というが、無色透明の意である。傾聴しても聞こえないもの、名づけて「希」というが、無音の意である。搏えようとしても捕まえられないもの、名づけて「微」というが、微かの意である。「夷・希・微」の三者は、これ以上分析追究できないものだから、混然一体となっている。天上も皦るくなく、地下も昧くない。縄縄と果てしなく伸びてゆく世界で、分節化できないから名づけることもできない。無の世界に帰ってゆく。これを「すがたのない状」、「無物の象」といい、まとめて「恍惚（うっとりと味わうもの）」という。この世界を迎えてもその先頭というものはなく、この世界が去ろうとするのに付き従っても、最後尾というものが見えない。太古の「道」の原理を執り行い、身の周りにある様々なことを制御するならば、かえって物事の始原を知りわきまえることができる。このように修行することを「道紀」すなわち「道理を紀めること」という。

『老子』本文で語られている「惚恍」という不思議な世界は、私たちが疲労の極致の後におちいる深

い眠りの世界、夢を全く見ていないけれど確かに経験している何らかの世界のことなのでしょう。

ある問題や謎の解明、研究のために突き詰めて考えても考えても、調べても調べてもどうしても解明できなかったことが、あるとき放心状態の中で突然ひらめいたり、夢の中で忽然と悟ったり、ヒントが得られたりして急転直下、解決できたりすることがあります。

「視」たり「聴」いたり「摶」えようとしたり、ひたすら努力し、あがきぬいた果ての、無明の闇、暗黒ではなく白いような闇の中で、恍惚と「心身脱落・脱落心身」しているときにこそ、本来の力や知恵が覚醒するものなのでしょう。